

「書くこと」の保幼小連携

前 田 敬 子

(2015年2月3日受理)

1. はじめに

保幼小の連携、とりわけ「書くこと」の連携を考えると、その課題とは何か。保育者と小学校教諭の双方に、鉛筆の持ち方と平仮名の筆順に関するアンケートを実施した。ねらいは、幼児教育と小学校教育の間隙を埋め、育ちの連続性を保障するより良い支援を考えることにある。

補足的に、本学幼児教育学科学生の鉛筆の持ち方、平仮名筆順の調査を行った。これは、過去に卒園、卒業を経た子どもの追跡調査の意味と、近い将来保育に携わる保育者候補の実態を知る意味を兼ねている。

課題は、個々の自発的な活動を尊重する幼児教育と指導目標を掲げる小学校の差を埋めることに尽きるのかもしれない。まずは、それぞれの場の課題から示したい。

2. 幼児教育の文字

福井県下の保育者97名に保育活動における平仮名をテーマに自由記述を求めた。そこに浮かび上がる現状を、適宜小見出しを付けつつ、以下にまとめる。()内数字は、同様の記述を含む人数を示す。特に数字の無い事項は1名の意見であることを示す。

ただ、選択肢でなく自由記述であるため、数字は全体に占める割合の目安として解釈されたい。

(1) 子どもは好き勝手に書く

「園で教えなくても、子どもは家庭で平仮名を覚えてきてしまう」(97名中14名)「記号のように覚えて好きに書いているので、間違った筆順であ

ったり、筆順の意が無かったりする」(97名中22名)「鏡文字がある」(97名中7名)など、自由に文字に親しむ幼児の姿が見える。

(2) 個人差が大きい

「文字に関する興味や書く力には個人差が大きく、全く文字に興味を示さない子もいる」(97名中30名)。「興味の差は3歳児から見られる」(97名中2名)、「男女差がある」(97名中2名)、「4歳児で書く能力に差ができており、就学直前でも50音を読めない書けない子がいる」など、幼児によって差が大きいと分かる。

(3) 持ち方の指導は難しい

「鉛筆はそもそも持つ機会が少ない、お箸やスプーンも正しく持てない(97名中5名)」「鉛筆以前にスプーンの持ち方を家庭と連携したいが、なかなか難しい(97名中2名)」「4、5歳になると鉛筆の持ち方に癖が見える。早い年齢から絵を描くことが好きな子など、持ち方が既に癖になっている」と持ち方指導の難しさがうかがわれる。

(4) 保育者が教えてもよいのか？

「幼稚園や保育園で鉛筆の持ち方や筆順を教えてよいのか(97名中6名)」と指導を問題化する声がある。「正しい鉛筆の持ち方や筆順など伝えたいが、保育者は教師ではないため、専門的な知識はなく、どこまで教えていいか悩む(97名中8名)」と立場や能力の不安をのぞかせている。

「保育士が筆順正しく美しい字形で書けないと、子どもにも教えられないので充分気をつけたい」、「保育士向けの文字指導の研修があれば参加したい」(97名中4名)、「自分の思い込みや書き方の

癖が出ないように、正しい字のバランス、筆順、はね、はらいを子どもたちに見せ、伝えられるようにする」、「平仮名の本や書き方の本を見直すようにする」(97名中2名)などの回答もあった。「保育士の中で小学校教諭の免許をもっている保育士が先生役になり、5歳児対象に平仮名の授業のような時間を設けている」という。

(5) 「教えないで」と言われた

「就学前に間違えて覚えるくらいなら教えてほしくないと言われたことがある」等、過去に何がしか抑止のコメントを受けたという記述も少なくない(97名中12名)。「保育者として子どもの文字に対する興味や書きたい気持ちを大切にしているが、小学校の先生に『鉛筆の持ち方や筆順が間違えていて困る』と言われた」「小学校の先生に『読めるようにはしておいてほしいが、書き方は小学校で』と言われた」「小学校併設の幼稚園なので、『小学校から始めますので(教えなくてもよい)』と言われている」などの例がある。

(6) 就学前の準備範囲が不明

「小学校側の求めるレベルが(学校内の先生によっても)統一されていないから、園の目指すべきレベルも明確でない」(97名中22名)と悩む声も少なくない。小学校の求めるレベルが「平仮名が読める」段階か「自分の名前が書ける」段階か「平仮名すべてが書ける」段階か明確でない。「筆順、鉛筆の持ち方を正す」、「鏡文字は無くす」レベルまで、幼児教育で担うべきかが明確でないという。

(7) 文字に興味をもたない子への対応

「(小学校で文字が書けることを前提に授業が進められると聞いたので)、文字に興味をもてない子どもへの対応が課題だ。」など興味をもてない子に焦点を当てた記述も多い(97名中10名)。

(8) 板挟み

「保護者からは『就学前に(平仮名が)すらすら書けるように』との要望がある一方、小学校側から『指導上困る』との要望がある。」「親も子ども

も平仮名を早い時期から教えたり興味をもって書いたりするが、小学校側はやりにくいのではないか。個人差がついていて指導が難しいと思う。」と保育者が、保護者・子どもの要望と小学校側に対する遠慮の狭間で途方に暮れる様子がうかがわれる。

保護者に対する思いも複雑である。「保護者は誰か他の子どもが平仮名を書いているのを見つけると、自分の子にも書かせたいと思って書かせているようだが、側について正しく教えていない気がする」「親は筆順については、意識していないか見ていないかで無関心である」「家庭で低年齢児にドリルなどを与えて就学に備える例も少ないので、持ち方・筆順の改善は難しい」「家庭で保護者が教えず、園に指導してほしいと言ってくる」「保護者は園で教えることを喜んでいるようだ」「家庭で教えるのは良いが、鉛筆の持ち方や筆順は園がフォローする大切さを感じている」「読めても書けない子の保護者が、周りの友達と我が子を比べて『どうしたらよいか』と心配する。その不安に対して、保育士や幼稚園教諭の立場からどのように返答しようか困る」

保育者は子どもと小学校の板挟みになり、「園で教えていなくても家でどんどん覚えてしまうので、覚えた後の対処法になる。その都度、間違いに気づいたら個別に教え、クラスとしても就学前は大きな差が出ないように全員に知らせるきっかけにしたい」と苦悩することになる。

(9) 園による温度差

「字を教えている園と遊びの中で教えている園との差を感じる。」という声が示すように、文字の扱いは、園による差が非常に大きい。

「ワークブック・十マスノート・連絡帳」などの用語が回答に含まれ、実施がうかがわれる延べ数は、97名中15名であった。

ワークブックについては「園でワークシートを使用するが、その時点で個人差があり、指導が難しい。」「5歳児7月ごろからワークブックを利用して、一人の先生が数人の子どもを見ているが、早く4歳児ぐらいで形から入った子には筆順が正しくない例がある」「12月の発表会が終わってか

らようやくワークシートを通して練習する園と4月から小学校のようなノートに一字一字書く練習をする園など、その差が小学校に行ってからどのように出てくるか興味がある」などの記述があり、開始時期は7月や12月などばらつきがある。

「遊びに文字に取り入れたり、文字に触れる機会を多くしたりして、文字に興味を持たせる」(97名中24名)、「字を書いているのを見たら、否定はしないで、正しい持ち方や筆順を伝えている」(97名中22名)など、子どもの自発性を尊重する姿勢を基本としながらも、「筆順を教えるのは難しい」(97名中8名)、「鉛筆の持ち方の指導までは行き届かない」(97名中7名)の声が示すように、自由な活動の中で、すべての幼児を把握することは、クラス員が多いほど難しく、効率化のためにワークを使用するのだろう。

ワークを使用せず、自然に親しませる姿勢を貫く園でも、「楽しく読んだり書いたりするためにはどうしたら良いか(ワーク以外の工夫はないか)」と模索しながら、「3・4・5歳児の年齢ごとにどのくらい文字や言葉に対する興味づけや学習が必要なのか」が課題である」とし、年齢にふさわしい活動を模索している。例えば「3歳児は言葉集め、4歳児は線遊び、5歳児は自分の名前書きや連絡帳の簡単な伝達」など、園ごとに年齢別の活動の目安を探っているようだ。

ワーク使用不使用に関わらず、年齢ごとの活動には、およその線が見えてくる。具体的な年齢と挙げられた活動を拾ってみると次のようになる。

〈3歳〉「小さい頃から線遊びをしている」、「3歳ごろから遊びの一環で文字に触れていく」、「鉛筆の持ち方を3～4歳児から教える必要があると感じる」、「年少児は言葉集めをしている」

〈4歳〉「年中児の頃から平仮名に親しめるように言葉集めから始めている」、「年中児は名前を書く、ハンコで文を書く、線遊びをしている」

〈5歳〉「年長児だと平仮名カードを取る遊びをする」、「年長児は一斉活動の中で、郵便ごっことして文字を書く機会をもったり、お家の方にメッセージを書いたり、一緒に絵本を見て自然に興味を持つなどするように心がけている」、「月刊絵本を通して、字形、しりとり遊び、逆さことばで興

味関心を育てている」、「当番活動の中に連絡帳配布を入れている」、「年長クラスで自分の名前の読み書きはできるようにする」、「5歳児は10月ごろから、指で書くことから始まり、一緒に一文字ずつ、線ワークや文字ワークを始めている」、「年長児は後半から連絡帳を書く練習を始める」。

この他、年長児に「ワークなどを利用して平仮名を読む、書く練習をしている」、「かるたや黒板を使って、一日一つ平仮名の勉強をしている」、「給食を食べ終わった人から自分の名前を書き、その場で確認指導する」、「ボードに4つの部屋を書いて、どの部屋から始まるかを伝えたり、書き順に気づかせたりしている」「ワークを使用したり、ノートに書かれた見本の下に書いたりしている」「筆順の間違ひは、正しい筆順をその都度伝える。ノートで練習するときは、お手本の字をしっかり見て真似をして書く(ゆっくり書く)」という記述も見られた。「全体で筆順、形(四角マスはどこから始まって、など)、はらいやおさえを伝えても、実際に自分で書く時には、自分の好きなように書いてしまう。どこまで一人ひとりに伝えるべきか」など、ほぼ小学校と同レベルの指導がうかがわれる記述もあった。

「字を書けること(興味関心)を優先すべきか、正しい筆順まで伝えるべきか」(97名中4名)の疑問に悩みつつ、低年齢児では「自分の名前を覚えられるようにする(持ち物を自分で取る、平仮名で書いて示す、など)」(97名中4名)、年長児では「自分の持ち物(月刊絵本など)に名前を書く」(97名中10名)、全般的には「自由なお手紙交換をしている。自由遊びのときに書ける子は自分の名前や文字を書く」(97名中4名)、環境整備の点では「さりげなく50音表を用意し、いつでも書けるようにしておく」「歌の歌詞を貼る」「行事や活動を文字で知らせる」「年齢に応じた絵本を置いている」(以上97名中計10名)などが最大公約数のように見受けられる。

(10) 家庭との連携

「鉛筆の持ち方、筆順などについて、家庭でも見てほしいと伝える」(97名中9名)、「クラス便りなどで知らせる」(97名中2名)、「就学前に自

分の名前は書けるようお願いしている（97名中2名）、「玄関に掲示をし、保護者へ伝えている」、「スプーンの持ち方から基礎を作っていきたいので家庭の協力を求めている」「箸も正しく持てるように遊びなどを提供している」「家庭との連携が必要だ」との声がある。

(1) 鉛筆の持ち方

「（鉛筆をもつ機会が少ないので、）ぬりえ等をして、遊びの中から鉛筆を持つ機会を作っている」（97名中2名）、「三角鉛筆を使い、持ち方の癖がつくようにしている」、「年中児に鉛筆を持つときの器具を使わせ、年長児では三角鉛筆を使わせている」、「まず線の練習をして鉛筆の持ち方や筆圧の練習をしている。その後、十マスノートで書きやすい文字や自分の名前から書くようにしている」と独自の取り組みもうかがわれる。

3. 幼児教育の課題

総括すれば、子どもが早い段階から文字を覚える現実と、その現実にも関わらず、小学校側が必ずしも就学前の文字体験を歓迎しない気配を保育者が感じていることに、そもそもの矛盾がある。

(1) 子どもの個人差

①文字に興味関心を全く示さない子どもが一定数存在する一方、文字に興味関心をもつ子どもは先に進んでいく。当然、鉛筆の持ち方や筆順が正しくない例も見受けられる。だが、子どもの自主性を重視し、環境や遊びを通して子どもの育ちを支える幼児教育では、たとえ子どもが間違っている、正しい仕方を「個別に」伝えることが主たる対処である。

興味関心に個人差が大きければ、個別の対応にならざるを得ない。だが、自由遊びでも一斉活動でも、すべての子どもに目が行き届いているかと言えば、当然ながら限界がある。

②鉛筆の持ち方や筆順について、園は家庭に協力を求めている。園が文字を教えることを喜ぶ保護者も少なくなく、自分の子どもが他の子どもに遅れることを恐れる保護者の不安を保育者は

察している。文字を早く覚えてくる子どもの存在や保護者の要望（就学後に困らないようにしてほしいという願い）が、園の一斉指導の背景にある。

(2) 小学校が求める一定レベルへの疑念

①小学校は就学前にどこまでのレベルを求めるのか。保育者側は、目指すべきレベルが把握できていない。既に小学校と連絡会議をもつところもあるが、会議をもっても、到達すべき具体的なレベルがわからないという声がある。

②就学前に求められるレベルの不明確さから派生して、年長児の活動にばらつきが生まれる。片や専ら遊びの中で自然に興味をもつことを重視する園があり、片やワークを使用したり連絡帳を自分で書いたりする園がある。

③書く力は、年長児では「自分の名前を読める」「自分の名前を読み書きできる」「すべての平仮名が読める」などのレベルが園ごとに設定され、年中児、年少児それぞれの段階にふさわしい就学準備活動が試行錯誤されつつ展開されている。

④鉛筆の持ち方は、元来、園では鉛筆を持たせる機会が少ない。塗り絵、線遊びなどの活動を筆圧の練習としてさせている園もある。

(3) 小学校への遠慮

①就学前の園における文字の指導（あるいは活動）が、小学校側に必ずしも歓迎されないと保育者には感じられている。過去に、就学後の子どもの鉛筆の持ち方や平仮名の筆順が正しくなく、既に修正が利かない状態であったことを、園に起因するものとして小学校側から指摘された経験が、保育者の一部には印象深く記憶されているらしい。

②保育者側の一部には「教諭」でもない自分が教えていいものかという戸惑いがある。もし教えるならば、まず保育者の研修会や保育者自身の学びが必要だという謙虚な意見もある。

4. 小学校の文字

福井県越前市内の小学校1年生の担任教諭31名を対象にアンケートを実施した。回答は選択肢から選ぶものが大半で一部記述式である。集計結果そのものは末尾に示す。アンケートから読み取れる内容をまとめたい。

- ①入学時の子どもの文字能力は、「ほとんどの平仮名が書ける」「半数程度の平仮名が書ける」という回答が3分の2程度ある一方、「自分の名前も書けない子どもが少なくない」とする回答もあり、ばらつきが見られる。
- ②読み書きの力には個人差が大きいが、出身園の差というよりも子どもの家庭環境や経験の差であると小学校教諭は受け止めている。
- ③鉛筆の持ち方が正しくなく、既に癖がついており、その矯正は難しいと小学校教諭の約9割が感じている（31名中27名）。
持ち方練習用器具を使用するクラスは全体の約4割で、効果については「普通」という回答が多い。このことは、その使用効果が積極的に「効果がある」と断定できるレベルでないことを示しており、既に癖がついてからでなく更に早い時期から矯正する必要性を示唆している。
- ④筆圧が極端に弱い子どもの存在が複数の回答に表れている。
- ⑤鉛筆の持ち方が子ども一人ひとりについて調べられている割合は全体の3分の2である。
- ⑥すべての平仮名の筆順が一人ひとりについて調べられている割合は全体の3分の1であり、鉛筆の持ち方ほどには調べられていない。
- ⑦平仮名の筆順が既に間違えており、直しにくいと感じている小学校教諭は約半数である（31名中14名）。筆順の直しにくさを感じる割合は鉛筆の持ち方の直しにくさを感じる割合に比べれば少ない。（それは平仮名の筆順について、さほど調べられていないためかもしれない）。
- ⑧小学校1年生が「読み誤りやすい」や「書き謝りやすい」文字は、リストアップすることができる。読み間違いは「め」「ぬ」、「ね」「れ」、「は」「ほ」、「い」「り」のように形が似ている字同士や「ね」「ぬ」、「ら」「だ」のように音が

似ている字同士に起こる。筆順の間違いは、「も」「や」「ら」「な」「せ」「よ」が多い。「ほ」の上を突き出す書き間違いも多い。

5. 保幼小連携の課題

課題は、究極的には、個々の自発性を尊重して育ちのレベルより育ちの方向性を共通認識とする幼児教育と、学年ごとの指導目標（即ちレベル）を掲げる小学校の差に行きつくように思う。

幼児教育では、遊びや活動を通して子どもの興味関心を尊重しつつ、きめ細やかな個別対応を心がけている。だが、興味関心に個人差が大きく、全く文字に興味を示さない子どもを引き込む工夫も為されるが、すべての子どもに正しい鉛筆の持ち方や筆順を伝えるには限界がある。そのため、家庭に協力を求めている。

就学に備えて、一部の園では、ワークなどを使用して文字を教えている。だが、どこまで教えればよいのかが不明確なため、戸惑いを感じている。

それに対して、小学校では、一斉指導が主になる。鉛筆の持ち方の指導も「一斉に機会を捉えて」指導されている。しかし、すべての子どもが把握されているかと言うと、全体の3分の1は調べられていない。平仮名筆順については、一人ひとりすべての文字を調べている割合は全体の3分の1で、3分の2は調べられていない。

鉛筆の持ち方や筆順が正しくない場合、小学校教諭はその原因を、出身園の活動よりも家庭環境や子どもの経験の差であると認識しており、（保育者側の「『園では教えないで』と小学校の先生に言われた」という回答と食い違う。母集団が異なるので食い違いは当然と言えば当然だが、いずれにせよ）、既についてしまった癖の矯正は難しいと感じている。

では、これらの課題の改善をどのような観点から考えればよいのか。筆者の考えを述べたい。

(1) 正しさを伝える時期

園で教えなくても子どもは就学前に文字に興味関心を持ち、文字を覚えて書いている。鉛筆の持ち方や筆順の指導は果たして小学校入学後でよい

のだろうか。子どもの現実を直視した保幼小の連携が必要である。

(2) 保育活動の差

仮に、小学校に入るまで鉛筆を持ったことがない、小学校に入って生まれて初めて鉛筆を持つ子どもがいるとすれば、それはいかがなものか。ワークブック等に鉛筆で書かせる園もあるが、鉛筆をほとんど持たせない園もある。家庭環境や子ども自身の興味関心だけでなく、園の保育活動の差が就学時の能力差を助長している可能性がある。

(3) 書く力の準備と矯正用具使用時期

鉛筆の持ち方練習用器具や三角鉛筆などは、鉛筆使用開始時期にこそ効果を発揮する。幼児教育では鉛筆を使う機会がほとんど無い一方で、小学校教諭は子どもの筆圧の弱さを問題視している。筆者は必ずしも文字の早期教育に賛成する立場ではないが、就学前には、塗り絵などで手指や腕を動かしたり、筆圧を調整したりする訓練が必要だと考えている。年長児にいきなり鉛筆を持たせて文字を書く活動を取り入れるのではなく、年少、年中、年長と段階的に、読み書きの準備性を培うことが理想的であり、その活動（遊び）を工夫し、練習用器具や三角鉛筆などの使用も適宜取り入れるべきではないだろうか。

(4) 縦の連携

就学前の子どもの読み誤り、書き誤りがちな文字は、小学生の読み誤り、書き誤りのリストアップから推測できる。保育者がそのリストを知るだけでも心に余裕が生まれるのではないだろうか。

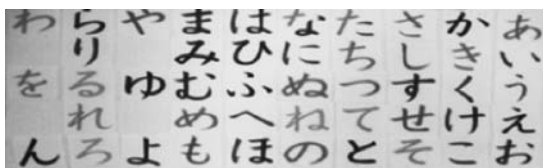
(5) 横の連携

幼児教育と小学校の縦の連携のためには、園同士の横の連携、小学校低学年部会の横の連携が不可欠である。就学前に身に付けるべき力やそのためにふさわしい活動の目安を共通認識することが望ましい。

(6) 家庭との連携

家庭に協力を求めるにせよ、子どもの育ちに沿

う一貫した姿勢で、園と小学校が共通認識に立つて取り組むことが、家庭の協力を引き出しやすくし、子どもに良い結果を及ぼすことになる。



(7) 個人差を緩和する環境づくり

園や小学校で50音図が使用されているが、パネルシアター 50音図、しかも字形の似通う字を同じ色で示したもの（写真）を筆者は考案した。園では字形から読みを自然と覚え、小学校では筆順を覚える一助になる（字形と筆順はほぼ連動しているからである）。特に小学校の教室に、自由に子どもが触れ得るように備えておくと、環境を通して自ら学ぶ幼児教育の方法が生かされ、教室環境が子どもの育ちの連続性を支えることになる。

6. 本学幼児教育学科生へのアプローチ

保幼小の連携を考えるにあたり、補足的に将来の保育者たる学生の平仮名筆順と鉛筆の持ち方を調査した。

(1) 実態

① 平仮名の筆順

平仮名表に、正しい筆順を数字で示す方法で調査を行った。2013年9月25～30日に幼児教育学科1回生と2回生の合計258名を対象に平仮名の筆順を調査した。その結果が表1である。続いて、2014年4月18日、24日に幼児教育学科1回生（再履修生含む）128名を対象に平仮名の筆順を調査した。その結果が表2である。

2回の調査とも、「も」の筆順の誤りが50%近くあり、「や」「よ」「せ」「ら」がそれに続く。全体の35～36%の学生が1文字の誤答で、一人あたりの平均間違い字数は、2013年は1.3文字、2014年は1.02文字であった。個々の学生を見ると誤りの最多は、2013年に8文字誤りが0.4%、2014年に5文字の誤りが1.6%見えた。

表1 2013年度 筆順調査

誤り文字	人数	割合
も	132	51.2%
や	44	17.1%
よ	37	14.3%
ゆ	28	10.9%
な	24	9.3%
ら	20	7.8%
せ	13	5.0%
か	8	3.1%
き	2	0.8%
さ	2	0.8%
ま	1	0.4%
む	1	0.4%
る	1	0.4%
を	1	0.4%

表2 2014年度 筆順調査

誤り文字	人数	割合
も	60	46.9%
や	24	18.8%
よ	24	18.8%
せ	7	5.5%
ら	7	5.5%
き	1	0.8%
さ	1	0.8%
ほ	1	0.8%
ま	1	0.8%
を	1	0.8%

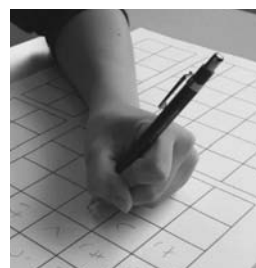
②鉛筆の持ち方

学生に見られる正しくない持ち方を写真で示しつつ特徴を述べる。全体に占める割合は詳しくは後に述べるが、(ア)が3～4割、(オ)が2割、(イ)(ウ)(エ)総合で2割程度である。正しい持ち方は初回調査では2割程度に過ぎなかった。

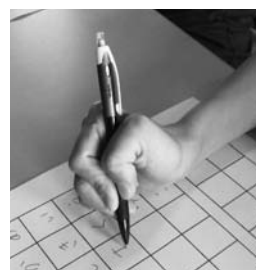
(ア) 親指突き出し型（正しくは親指の腹で筆記具を支えるが、親指の第一関節あたりか第一関節よりも付け根に近い部分で支えている。「(イ)にぎり型」に移行していく手前のような持ち方。その変形の「親指おさえ型」を含む）



(イ) にぎり型（人差し指と中指をそろえて鉛筆を親指側に押すことで支えている。鉛筆の頭が机の向こう側＝縦書きの場合の上、黒板側に向かって立つ。）



(ウ) つまみ型（親指と人差し指と鉛筆がほぼ平行に見える。ほとんど親指と人差し指だけで鉛筆を支えている。親指第一関節がかなり不自然な曲がりを見せている）



(エ) つかみ型（上記、「(ウ)つまみ型」の指が掌側に引きつけられている形。親指と人差し指を曲げて掌側に固定しているために、ほとんど鉛筆に自由が無く、柔らかに動かせない状態。この持ち方も、鉛筆が垂直か、黒板側に向かって鈍角に立つ。）



(オ) そらし型（人差し指の第一関節が、外にそり過ぎている。中指の第一関節に鉛筆を持たせかけて、人差し指に負担がかからないようにするとよい。）



③鉛筆の持ち方と筆順間違い数の関係

幼児教育1回生の鉛筆の持ち方のタイプ別に、平仮名筆順の誤り数を見るため、タイプ別筆順間違い数を算出すると表3の通りである。鉛筆の持ち方は4月と12月の2回調査したが、学生自身の矯正の結果、2回目では正しい持ち方の学生が増えた。4月に調査した平仮名筆順間違い文字数を4月と12月に行った持ち方調査のタイプ別に見てみると、以下ようになった。表内数字は筆順間違い文字数の平均文字数を示す。

表3 鉛筆の持ち方別筆順誤り字数

	4月	12月
①親指突き出し型	1.1	1.1
②つかみ持ち、にぎり持ち、つまみ持ち	1.1	1.2
③人差し指そらし型	1.3	0.9
④正しい持ち方	0.6	0.8

この結果から、短大入学時に鉛筆を正しく持つ学生及び12月までの8か月間に矯正の意志がはたらいた学生は、4月の段階でも平仮名筆順間違い字数が少なく、逆に8か月を経ても矯正しようとしなない学生は、4月の入学段階でも筆順間違いの多い傾向にあることがうかがわれる。

④書かれた文字と鉛筆の持ち方との関係

「つまみ持ち・つかみ持ち・にぎり持ち」の学生の文字を集めて見ると、概して小さく、紙に打ちつけるような筆致であり、始筆と終筆の間が短く、しかも始筆終筆に力が無く、はっきりしない例が多い。この点を明確な基準に照らして明らかにしたいと、「も」の上方向への「はらい」や「ら」の一画目から二画目への続き加減、「せ」「や」の二画目から三画目への続き加減を取り立てて調査したところ、確かに「つまみ持ち・つかみ持ち・

にぎり持ち」の学生には、細部を粗略にする例が多い。正しいもち方の学生の中にも粗略な例が若干見えるが、割合としては少ない。

(2) 教えられた記憶

短大生1回生2回生245名を対象に、誰に教えられたかを尋ねると結果は表4、5の通りであった。

表4 鉛筆の持ち方を教えた人

お父さま・お母さま	35.1%
おじいさま・おばあさま	4.9%
保育園・幼稚園の先生	8.2%
書道塾、学習塾の先生	4.1%
友だちや兄弟	0.4%
小学校の先生	9.8%
誰にも教わっていない	0.4%
覚えていない	37.1%
合計	100.0%

表5 平仮名の筆順を教えた人

お父さま・お母さま	24.1%
おじいさま・おばあさま	1.6%
保育園・幼稚園の先生	13.9%
書道塾、学習塾の先生	4.1%
友だちや兄弟	0.4%
小学校の先生	24.9%
誰にも教わっていない	0.8%
覚えていない	30.2%
合計	100.0%

「覚えていない」割合が低くないが、鉛筆の持ち方も平仮名の筆順も、家庭の影響力の高さを裏付ける結果となった。鉛筆の持ち方は親に教えられたと回答する割合が最も高い。筆順は小学校の先生に教えられたと回答する割合が最も高く、親はそれに続く。保育園・幼稚園で教わったとする回答は、持ち方・筆順ともに3番手を占めている。

次に、誰かに教えられたにも関わらず現時点で鉛筆を正しく持てないのは、小学校低学年で禁止されているシャープペンシルの関連が想起されたため、シャープペンシル使用開始時期を尋ねた。すると、表6の通り、小学校中学年から高学年にかけて使用を開始する割合が高いことが分かった。

(3) 正しい持ち方への矯正

学生の鉛筆の持ち方を目視によって2回調査したところ(2013年生の1回目は、2013年9月25～30日、

表6 シャープペンシル使用開始

小学校に上がる前	1.2%
小学校低学年	3.3%
小学校中学年	23.7%
小学校高学年	42.0%
中学生以降	28.6%
今まで使ったことがない	0.0%
その他、覚えていない等	1.2%
合計	100.0%

2回目は2014年12月下旬、2014年生の1回目は2014年4月28日、2回目は2014年12月17日)、表7の通り、2回目に正しい割合が増えた。これは、授業の度に正しい持ち方を意識させたこと、持ち方矯正用の三角鉛筆の使用を手書きレポート筆記の際に教員側が奨励したことによる、学生の意識改革の結果と見ている。

次に、大豆運びによって正しい持ち方がいかに有効であるかの検証を試みた。結果は表8である。1回目の調査(2014年4月28日)では、正しい持ち方のグループが良い成績で、鉛筆の正しい持ち方と箸の持ち方の関連を示唆する結果となった。だが、2回目の調査(12月17日)では、必ずしも正しい持ち方のグループが多くを運べなかった。1回生2回生とも同じ傾向であった。

持ち方を矯正する学生が増えた結果、鉛筆の矯正が必ずしも箸の持ち方にまで波及しないこと、正しくない持ち方の学生でも長年の癖が固着し修練された結果、少なくとも短時間の大豆運びにおいては大きな不都合を生じないこと、2回目の調査で測定時間を1回目の2倍の60秒間にしたため、学生の根気、あるいは過去に一度測ったことによる惰性など、持ち方以外の要素が影響したことなどが原因として考えられる。

7. 幼児教育学科学生と保幼小連携

2年間という短期間だが、「文字」関連でも特に基礎的な、鉛筆の持ち方や平仮名の筆順を確認し、正しくない学生の学び直しを援助していきたい。

学生たちが幼児教育における文字の扱いの実態や小学校低学年の学習内容を知ること、質の高い幼児教育につながるはずである。

表7 鉛筆の持ち方タイプ分け

	2013年生	2014年生	
①親指突きだし型	29.0%	43.7%	1回目
②つかみ、つまみ、にぎり持ち	24.7%	21.4%	
③人差し指そらし型	21.6%	15.1%	
④正しい持ち方	24.7%	19.8%	
	(147人)	(127人)	
①親指突きだし型	31.0%	34.1%	2回目
②つかみ、つまみ、にぎり持ち	15.7%	17.8%	
③人差し指そらし型	13.0%	25.2%	
④正しい持ち方	42.6%	23.0%	
	(135人)	(118人)	

表8 運んだ大豆の数

2014年4月28日			
鉛筆の持ち方タイプ	大豆計	平均	×2
①親指突き出し型	537	9.94	19.88
②つかみ持ち、にぎり持ち、つまみもち	240	9.6	19.2
③人差し指そらし型	253	10.1	20.24
④正しい持ち方	255	11.1	22.18
合計	1285	10.1	20.2
2014年12月17日			
鉛筆の持ち方タイプ	大豆計	平均	
①親指突き出し型	855	20.4	
②つかみ持ち、にぎり持ち、つまみもち	411	19.6	
③人差し指そらし型	294	19.6	
④正しい持ち方	738	19.4	
合計	2298	19.7	

8. 今後の展望

子どもの育ちを中心に据えた保幼小連携の実現には、保幼小連携に留まらず、両者の協力がいかに「家庭との連携」を実効性あるものにし、家庭の支援を引き出せるかが鍵である。何となれば、保育者の記述に「園で教えなくても家で覚えてきてしまう」、小学校教諭のアンケートに「(文字能力の差は)家庭環境や個人の経験の差による」、学生のアンケートに「(鉛筆の持ち方や正しい筆順は)親に教わった」ことが表われており、それらが「家庭」の影響力を裏付けているからである。保育園・幼稚園、小学校が一貫した内容・態度で以て、家庭に働きかけることが大切であろう。

なお、保幼小という育ちの「縦軸」にあたる連携のためには、「横軸」即ち、園同士、小学校同士の横の連携を一層深め、発達段階にふさわしい支援に関する知見を蓄積し、共有していくことも課題であり、広い視野から育ちを支える姿勢が求められている。

I 小学校1年生担任の先生にアンケート

越前市内の小学校17校の第1学年ご担当の先生31名を対象とし、表内数字は回答された先生の数を示す。

1. 鉛筆の持ち方の矯正に、児童に三角鉛筆または練習用器具を使用させていますか？

	はい	いいえ
(1) 三角鉛筆を使用している。	0	31
(2) 練習用器具を使用している。	12	19

2. 練習用器具の使用は全員対象ですか？ それとも特定の児童対象ですか？

練習用器具を全員に使用させている。	10
練習用器具を対象児だけに使用させている。	2
その他	0

3. 練習用器具は効果があると思いますか？

効果がある。	1
どちらとも言えない。普通	10
効果が感じられない。	1

4. 鉛筆の持ち方は、どのように指導されましたか？

ア 個別に機会をとらえ指導した。	4
イ 一斉に機会をとらえ指導した。	16
ウ 個別に集中して指導した。	0
エ 一斉に集中して指導した。	6
オ その他	5

5. 児童の鉛筆の持ち方はどのようなのですか？

ア 調べたらほとんど正しい持ち方だった。	0
イ 調べたら半数以上は正しい持ち方だった。	11
ウ 調べたら多くの児童が正しくなかった。	8
エ 調べないがほとんど正しい持ち方だろう。	0
オ 調べないが半数以上は正しい持ち方だろう。	10
カ 調べないが多くの児童が正しくない持ち方かもしれない。	1
キ その他	1

ア～ウ
計19

エ～カ
計11

6. 児童の鉛筆の持ち方は、どこに注意して見ていますか。(回答略)

7. 児童の筆順はどのようなですか？

ア 調べたらほとんどすべて正しい筆順だった。	4	ア～ウ 計9
イ 調べたら半数程度の児童に正しくない筆順が一字はあった。	2	
ウ 調べたら多くの児童に正しくない筆順が一字はあった。	3	
エ 調べないがほとんどの児童がすべて正しい筆順だろう。	4	エ～カ 計18
オ 調べないが半数以上の児童は正しくない筆順が一字はある。	14	
カ 調べないが多くの児童が正しくない筆順の一字がありそうだ。	0	
キ その他	4	

8. 児童の入学時の文字を書く能力について、どのように把握されていますか？

ア ほとんどの平仮名を書くことができる。	8
イ 半数程度の平仮名を書くことができる。	13
ウ 自分の氏名を書くことができる。	7
エ 自分の氏名も書けない児童少なくない。	2
オ その他	1

9. 日頃、児童の文字能力についてどのようにお思いですか？

ア 読む能力差が大きい。	21
イ 読む能力は出身圏による。	2
ウ 読む能力は家庭環境か個人の経験の差。	20
エ 書く能力の差が大きい。	14
オ 書く能力は出身圏による。	3
カ 書く能力は家庭環境か個人の経験の差。	22
キ 鉛筆の持ち方に癖がついており、直せない。	27
ク 平仮名の筆順を間違えて覚えており、直せない。	13
ケ その他	0

10. 読み間違いやすい字を教えてください。(回答略)

11. 書き間違いやすい字を教えてください。(回答略)

12. 保育園・幼稚園・小学校の連携で課題となるのはどのようなことだとお考えですか？(回答略)

13. シャープペンシル使用を許可していますか？

シャープペンシルを許可している	0
許可していない	31

14. シャープペンシルを使用する姿を目にしますか？

シャープペンシルを使う姿が見られる	1
見られない	30

15. 国語の授業に取り入れられる遊び的な要素をもつ活動は何ですか？

かるた（かるた作り、いろはがるたを含む）	16
言葉集め（言葉作り）	13
劇化	12
しりとり	10
動作化（ジェスチャーを含む）	7
なぞなぞ	6
音読劇（役割読みを含む）	6
言葉遊び	5
クイズ（私は誰でしょう？、連想ゲームなど）	4
歌遊び（となえ唱、歌、かえ歌、詩を含む）	4
50音パズル	3
交代読み（リレーして読み継ぐ、を含む）	3
一文読み（リズムをつけて読む、を含む）	3
まちがいさがし	3
お店屋さんごっこ	3
ペープサート	2
紙芝居（紙芝居づくりも含む）	2
百人一首	1
カレンダー作り	1
指遊び	1
名刺交換（自己紹介ゲーム）	1
読み聞かせ	1
ことばのビンゴ	1